

三文雑記Ⅱ

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード: 作成者: 細井, 幸兵衛 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/00065330 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



emarginata), ヒサカキ(*E. japonica* var. *montana*), サカキ(*Sakakia ochracea*),
モクコク(*Ternstroemia Mokof*), チャ(*Thea sinensis* var. *bohea*).

Elaeagnaceae : アキダミ(*Elaeagnus crispa*), ナワシログミ(*E. pungens*).

Punicaceae : ザクロ(*Punica Granatum*).

Myrtaceae : アデク(*Eugenia microphylla*).

Araliaceae : カクレミノ(*Textoria trifida*).

Cornaceae : クマノミズキ(*Cornus brachypoda*).

Rhodoraceae : ネジキ(*Lyonia Neziki*), アセビ(*Pieris japonica*), ミツバツツジ
(*Rhododendron dilatatum*), ヤマツツジ(*R. Kaempferi*), オンツツジ(*R.*
shikokianum), ツクシアカツツジ(*R. Weyrichii*), シヤシヤンボ(*Vaccinium*
bracteatum), スノキ(*V. Smallii* var. *minus*).

Ebenaceae : カキ(*Diospyros Kaki* var. *domestica*), クロキ(*Maba buxifolia*).

Symplocaceae : ミミヅバイ(*Bobua glauca*), シロバイ(*B. lancifolia*), ハイノ
キ(*B. myrtacea*), クロバイ(*B. prunifolia*), カンザブノウノキ(*B. theophrast-*
aefolia).

Oleaceae : ネヅミモチ(*Lygustrum japonicum*), ハチジヨウイボタ(*L. pacificum*),
ギンモクセイ(*Osmanthus asiaticus*), ヒヒラギモクセイ(*O. Fortunei*), ヒヒラギ
(*O. ilicifolius*).

Apocynaceae : テイカカヅラ(*Trachelospermum asiaticum* var. *intermedium*).

Verbenaceae : ヤブムラサキ(*Callicarpa mollis*).

Caprifoliaceae : コツクバネウツギ(*Abelia serrata*), スイカヅラ(*Lonicera japonica*),
ハクサンボク(*Viburnum japonicum*).

3. 寄主の統計及び要約

上記の目録で寄主を多く含む科を挙げて見るとツバキ科・シヤクナゲ科・モチノキ科・
クスノキ科・ハイノキ科・モクセイ科・サクラ科等はいづれも5種以上を含み、ついでニ
シキギ科・スイカヅラ科・ヘンルーダ科等がつづいている。之を落葉樹と常緑樹とに分け
て見ると、落葉樹(半落葉樹を含む)30種、常緑樹49種で、こうして比較して見ると常緑樹
の方が多し。然し更に問題とすべきはある種に寄生する量の点で、里見は伊豆大島及び八
丈島で観察した際にもずつと常緑樹が多かつたのを見たが、やはり寄主として一般に言わ
れている様に常緑樹の方が条件が良い様に思ふ。この理由を明らかにする手段の一つとし
てヒノキバヤドリギと寄主間の滲透性の相互関係を調査すると面白いと考え、里見は八丈
島で若干この実験を行つているが、未だ何とも言い兼ねる。

細井幸兵衛※ 三 文 雑 記 (II)

K. Hosoi : Miscellaneous Notes on Botany. (II)

嘗つて前号でヒメガンクビの産地を報じた陸奥、東津軽郡今別村の開墾跡地に沢山のヨ

※ 青森営林局林業試験場青森支場

ツバヒヨドリの群落があつた。注意してみたら無腺点のものもあつたので採つて置いた。その後、当地方の各地で採集した本属の標本を調べたら、偶然南津軽郡碓ヶ関村のものにも腺点のないのがあつた。暇の折、花の解剖をしてみても面白い現象を発見したので報告しておく。

即ち、本種は完全花であるのに、この無腺点のヨツバヒヨドリには、雌蕊の退化が認められ葯も不完全にしか発達していない。勿論花粉も入っていないようである。然し雌蕊に変化がないので結実も普通である。畢竟雌性花となつていたのであろう。

キク科ではフキ属 *Petasites* が雌雄異株の一つである。私が当地で観察したアキタブキ (*P. japonicus* Maximowicz subsp. *giganteus* Kitamura) では、雌性頭花の真中辺に雄性花の二、三混ざるのをよくみるが、本属 (*Eupatorium*) では、頭花中の花の数が少い為かその様な現象はみられなかつた。又、フキでは全くの雌雄異株であるが、本品には退化して葯上部の附属物もはつきりしない小さい葯が認められ、その上葯が個々に分離しているらしい。小花の外型も一見して区別される。私の乾腊標本では、普通の完全花は花筒上部が急に膨大となるのに、無腺点の雌性花では上部の膨みが目立たない。これは菊科では普通の現象だが、本雌性株を見分ける特徴となる。

何故、無腺点品が雌性であるのかその間の関係は全く知る余地もないが、ホシナシサハヒヨドリやホシナシヒヨドリバナにも斯る現象があるとすれば甚だ興味ある問題である。未だこれ等の品に恵まれないのが残念である。この際諸兄の御厚意に与り度くお願い申上げる。尙念の為に、私の標本は絶対に貧弱なものでもなく、今別産のものは対生葉、碓ヶ関産のものは三輪生葉のものである。

△シロソバナの産地として前号で当地のものを報じたが、東大の水島氏よりのお便りでは上州利根郡片品村(尾瀬、山ノ鼻の林下)で同氏が採つておる由、記して報告して置く。

前々号及び前号中、下記の通り訂正する。

| 正 誤 表 | | | |
|-------|-------|------------------|-------------------|
| 頁 | 行 | 正 | 誤 |
| 15 | 1 | <i>leucantha</i> | <i>leucanthus</i> |
| 16 | 1 | <i>rosulatum</i> | <i>rosulata</i> |
| // | 15 | f. | var. |
| 27 | 17 | 「と陸奥、下北郡下」削除 | |
| // | 23~27 | 「尙、………を得ている」削除 | |
| // | 32 | 果皮の毛 | 果皮の皮 |

代崎良丸※ ノハナシャウブ, ヒナノキンチャク

On *Iris ensata* Thunb. var. *spontanea* Nakai and *Polygala tatarinowii* Regel.

石川県において最近に自生の確認せられたものを挙げる。

(-) ノハナシャウブ *Iris ensata* Thunb. var. *spontanea* Nakai

※ 小松市犬丸小学校